機法一体章（四帖第十一通）

南無阿弥陀仏と申すは・いかなる心にて候や、しかればなにと弥陀をたのみて・報土往生をばとぐべく候やらん、これを心得べきようは・まず、南無阿弥陀仏の六字のすがたを・よくよく心得わけて弥陀をばたのむべし、そもそも、南無阿弥陀仏の体は・すなわちわれら衆生の・後生たすけたまえとたのみもうす心なり、すなわちたのむ衆生を・阿弥陀如来のよくしろしめして・すでに無上大利の功徳をあたえましますなり、これを衆生に回向したまえるといえるは・この心なり、されば、弥陀をたのむ機を・阿弥陀仏のたすけたまう法なるがゆえに、これを機法一体の南無阿弥陀仏といえるはこのこころなり、これすなわ

ちわれらが往生の定まりたる・他力の信心なりとは・心得べきものなり、

あなかしこ　あなかしこ

（不読）

明応六年五月二十五日これを書きおわる

八十三歳

機法一体章の大意

南無阿弥陀仏とはどういう意味なのか、またどのように阿弥陀如来を信じるならば浄土に往生することができるのか、それを

心得るためには、まず南無阿弥陀仏の六字のいわれをよく心得なければなりません。

南無阿弥陀仏とは、たすけると仰せになるみ仏に、おたすけくださいとおまかせする信心であります。そのようにおまかせする衆生を、阿弥陀如来はよくお知りになって、この上ない功徳を与えてくださいます。このことを「衆生に回向してくださる」というのです。

そこで、阿弥陀如来におまかせする信心（機）の衆生を、如来がおたすけくださる（法）ので、これを機法一体の南無阿弥陀仏というのです。これが私たちの往生が定まる他力の信心であると心得るべきです。